

北海道石灰石調査報告

第7報～第15報

目 次

第7報	北見国相ノ内村の石灰石……………熊野 純男・北川 芳男…	1
I	緒 言……………	1
II	地質概説……………	1
III	石灰石……………	2
第8報	北見国訓子府村大谷附近の石灰石……………土居 繁雄…	5
I	緒 言……………	5
II	位置及び交通……………	5
III	地 形……………	5
IV	地 質……………	6
V	鉍 床……………	7
VI	品 質……………	9
XI	鉍 量……………	10
VIII	開発に対する意見……………	10
IX	沿革及び現況……………	11
X	結 言……………	11
第9報	北見国佐呂間村知来附近の石灰石……………武田 裕幸・北川 芳男…	12
I	緒 言……………	12
II	地質概説……………	12
III	石灰石……………	15
第10報	石狩国当麻村開明附近の石灰石……………土居 繁雄…	17
I	緒 言……………	17
II	位置及び交通……………	17
III	地 形……………	18
IV	地 質……………	18
V	鉍 床……………	20
VI	品 質……………	20

VII	鉍 量21
VIII	開発に対する意見21
IX	結 言22
第11報	石狩国神居村雨紛の石灰石斎藤 昌之...23
I	緒 言23
II	位置及び交通23
III	地質及び鉍床23
IV	鉍 量25
V	結 言25
第12報	胆振国穂別村福山附近の石灰石土居 繁雄...26
I	緒 言26
II	位置及び交通26
III	地質及び鉍床27
IV	鉍 量27
V	採石及び搬出条件28
VI	結 言28
第13報	日高国浦河町向別川上流の石灰石	
	湊 正雄・深田 淳夫・垣見俊弘・山田 一雄	...29
I	緒 言29
II	地質概説29
III	石 灰 石30
第14報	日高国様似村様似川上流新富附近の石灰石	
	湊 正雄・松井 愈	...32
I	緒 言32
II	地質概説32
III	石 灰 石34
第15報	日高国様似村幌別川上流の石灰石
	湊 正雄・魚住 悟・市川 輝雄	...38
I	緒 言38
II	地質概説38
III	石 灰 石40

第7報 北見國相ノ内村の石灰石

熊野純男* 北川芳男* 杉山清蔵*

I 緒 言

1951年夏、嘱により相ノ内村の石灰石の調査に従事した。未だ不完全ながら一応まとめて報告する次第である。

相ノ内の石灰石は以前から知られており、すでに北見石灰株式会社によつて稼行されているものである。しかしながら現在まで基礎的な調査はなんらなされておらず、採石状態も余り芳しいものとは考えられない。それゆえ筆者らの調査がいくらかでも役立てば幸いである。しかしながら、まだ不備な点が多く、問題はむしろ今後に残されている。

本調査に際し、齋藤仁、齋藤昌之氏外諸氏に種々御厚意を受けた。ここに感謝の意をあらわす。

II 地質概説

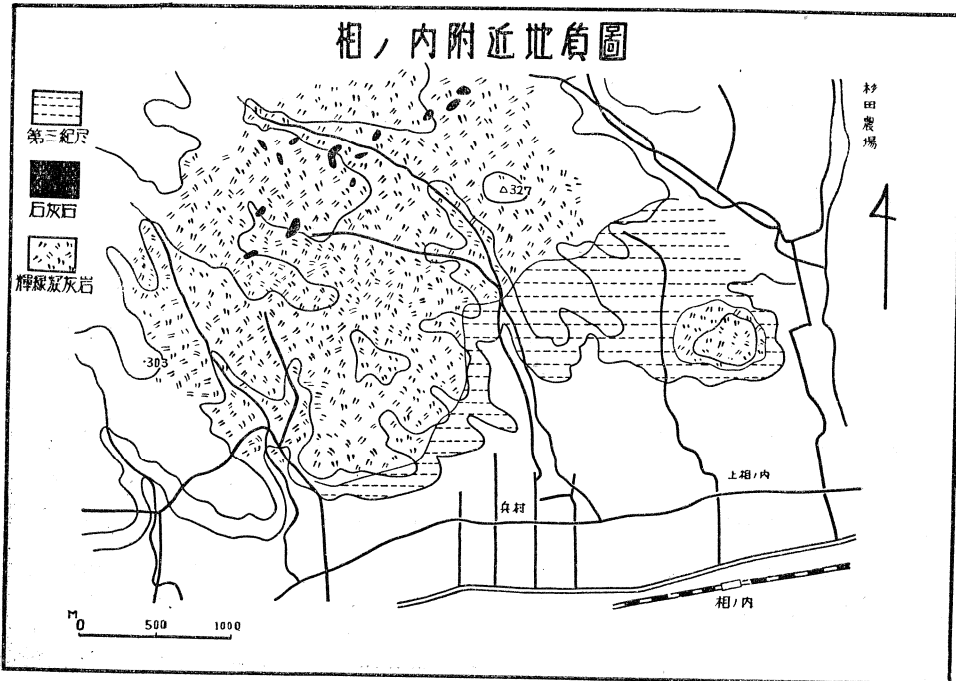
本地域の地質は山地の大部分を占める日高系と、それを覆う新第三紀層および北見付近に発達する丘陵を形成する洪積層からなる。その概略は次のごとくである。

第 4 紀	沖 積 層	砂・礫・泥土
	河 岸 段 丘	礫・砂利
	野 付 牛 層	全層浮石に富む、偽層あり、礫層砂岩層を介在
新 第 3 紀	若 松 層	細・中粒の堅硬なる礫岩
日 高 系		輝緑凝灰岩・珪岩

日高系： 本地域の最古の地質系統にして、構成する岩石は暗緑色、暗褐色等の輝緑凝灰岩および暗赤、暗褐および灰白色の珪岩を主体としている。

輝緑凝灰岩の岩質の変化は著しく、風化作用の進んだところは非常にもろく、赤褐色を呈する。この特徴はマンガンの存在を思わせる。標式的なものは緑色乃至暗緑色を呈し、硬質緻密であり、輝緑岩との区別に困難を感じる。石灰石は大部分この輝緑凝灰岩中に介在するが、石灰石との接触部は緑色の粘土状になつている所が多い。

* 嘱託



新第3系： 若松層と呼ばれる地層であり、日高系とは断層で接するものごとくであるが、多くは明瞭な不整合で蔽われている。本層は4~5纏の直径を有する日高系の岩石を礫とし、堅硬なる黒灰色細粒砂岩によつてかためられている。

洪積層： 野付牛層と段丘堆積物の二つから成つているが、前者は北見地方中部および南部の台地に標式的に露れるもので、主として火山噴出物を主体としている。地層はほとんど水平である。部分的には浮石が著しく、また偽層を呈する所もある。

Ⅲ 石灰石

本地域の石灰石は既に述べたごとく、日高系輝緑凝灰岩中に介在するものである。石灰石採石場付近は非常に露出が悪く、採石している石灰石をのぞいてはほとんど皆無に等しい。それ故、一見したところでは非常に膨大な岩体の如く思われるが、詳細に見ると幾つかの岩体に分けられる。これらは非常に不規則であり、断層で無数に切られているようであるが、今回の調査では地質構造の全般をつかむことが出来ず、誠に残念である。

いま便宜上、三つの石灰石 Group に分けて考察をすすめる。第1の Group は過去において採石し、一部現在も採石しつつある地域。この区域における石灰石の分布は第1図に示す通りである。岩体は7に分けられ、走向もそれぞれ異つている。

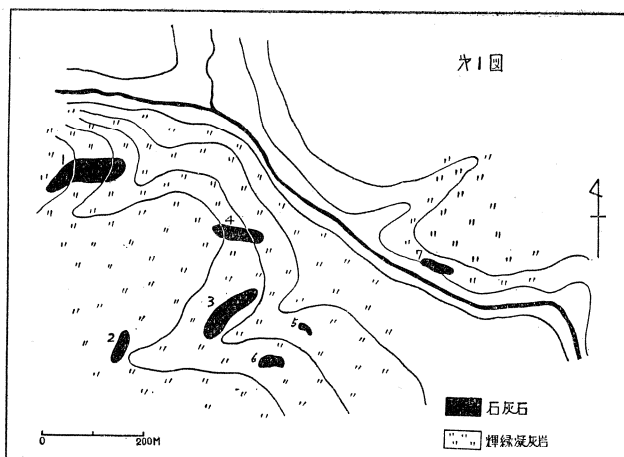
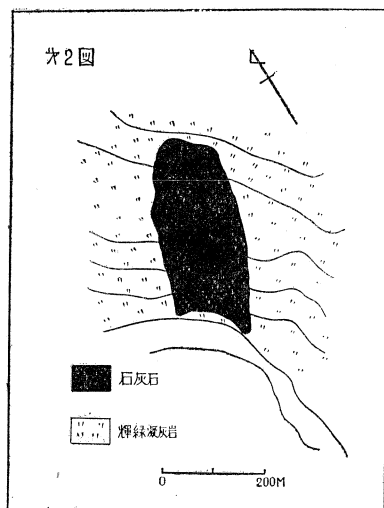
第1の岩体は現在稼行しつつあるものであつて、走向はほぼ北西である。岩質は灰白色乃至灰褐色を呈し、品位良好である。

推定埋蔵量 277,000 吨

第2岩体乃至第7岩体はすでに採りつくされた石灰石の残跡であるが、一応分布を知るため記入しておいた。

第2岩体は標高310米——ほぼ山頂附近に存在しており、岩質は暗褐色乃至黒褐色を呈する。特徴的なことは細い節理が発達し、板状にはがれやすく、化石を多く産する。この化石は時代の決定に非常に役立つものであるが、保存不良にして種の鑑定は困難である。

この箇所における輝緑凝灰岩との境界面は走向 $N 30^{\circ} E$ 、傾斜 $70^{\circ} W$ である。この関係はおそらく断層であろう。



第3岩体は第2岩体より品位の点では良好である。石灰石の採石跡を見ると、長径約100米幅約20米である。290米の地点における露出では上盤、下盤の輝緑凝灰岩との関係は明らかに断層によるものであり、同地点ではわずか8米の幅に窄つてきている。

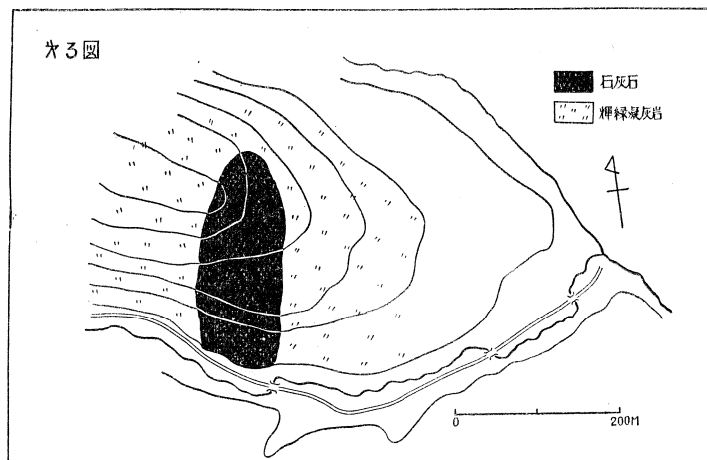
第4岩体は第3岩体と輝緑凝灰岩を一枚挟みほぼ平行に並んでいるが、これも同様採石の対象にはならない。

第4～第7岩体は極めて小さな岩体であり、しかもすべて採石されつくしている。特に第7岩体は石灰石自体が小さな断層によつて切られている。

これらの観察により、本地域の構造線はほぼ $N 30^{\circ} \sim$

$40^{\circ} W$ の走向を有するものであると推定される。

第2の Group は現在稼行しているもので、前記岩体より約1.2軒東南に位する。本岩体は灰白色乃至灰褐色を呈し、節理の発達著しい。また、前記第2岩体同様多くの化石を産するが、保存は不良である。



岩体の走向は $N 10^{\circ} E$ であり、岩体を追跡すると決して長くは続かない。大体の形態は第 2 図に示すごとくである。

推定埋蔵量 2500.000 吨

Ioc 3. この岩体は杉田の沢奥に位するものである。杉田沢は杉田農場の沢であり、現在稼行している石灰山の丁度北側にあたる。

地形は一般的になだらかで丘状を呈し、農作地を有している。しかし南北の斜面は比較的急傾斜であり、北側はより急な斜面を形成している。地形からも推察出来るように露出はきわめて悪く、皆無に等しい。

石灰石は輝緑凝灰岩中に介在されており、走向は大体南北もしくは $N 10^{\circ} E$ を示し、前述の諸石灰石岩体の延長と考えられる。露出不良のため輝緑凝灰岩との関係および他の岩体との関係は不明である。

調査によつて明らかになつた形態は第 3 図のごとくである。

石灰石岩質は灰白色乃至灰褐色を呈し、品位は良好である。

推定埋蔵量 110 吨